

京鹿子

昭和二十三年七月五日(田原川)創刊
昭和二十七年十二月一日發行
通巻九七六号(毎月一日發行)



12月号

創刊八五周年記念号

巨大風車 丸山佳子

手を振れば影も手を振る嵯峨小春

秋日傘アメリカ夫人笑顔よき

万物の限界きしと秋は逝く

この草もこれでおしまい蛇穴に





この辺で引き返えさうか杉落葉
腑におちぬところに朱橋初笹子
町小春なれどなじめぬ壁の色
旧街道に不思議な苗みょう字じ尾花風
のけぞりて巨大風車に洗心す
神は留守石垣に顔と声ありし



豊 田 都 峰 十 二 月 号

清 響 集 その 五 十 六



里 深 き 観 音 紅 萩 ほ どの 朱 唇
案 山 子 立 つ い ま し ば ら く の 野 の 暦
染 井 に 漱 ぎ て よ り の 萩 の 風
宿 間 屋 奥 行 き に 晩 夏 光 た め て
旗 揚 地 す す き こ ぞ り て 日 を は じ く
秋 晴 れ て ま た お 六 櫛 土 産 と す

秀華採集

盆終る畳の上を水の音

高木 晶子

門火を焚いて御霊を迎え、その多くの御霊を供養する。送火でお送りする。なにか御霊の退いてゆかれた感覚、供養して作者の心の重さが解き放されてゆく感覚など、盆過ぎの心情の具象と解する。日本人は水の漱ぎの力を感じていることなどを考え合わせもする。

落し文まこと略儀の候へど

河内 桜人

夜の鯉のきらびやかなる光琳忌

小川 文子

前句の洒落た連想、後句の光琳の画風への連想を評価する。

鈴鹿 仁

暮秋

鶺鴒呑みして鴉が急かす冬構
鳥翔てば暮秋の翳を引いてをり
吊し柿風が磨きし彩を生み
冬囲ふ身の程にして知足あり

系露忌三句

秋燕に空深すぎし誤算あり
語らふて人の心知る露万朶
鳥の瞳の恋す山河の薄もみぢ

近 詠

宇都宮滴水

光背

菰巻きて松の羞恥のはじまれり
柚風呂や使ふことなき葉ゆび
忽然と消ゆる杣人木守柿
渋柿の空よりくづる村境
人魚には無き座り胼胝暮れの秋
雪囲ひかくし切れない氏素性
光背や干柿列を正しけり

神麓集



よきことは気付かず
にゐる秋の蝶
新涼の身にそふ
起ち居夕灯し
比叡愛宕す
でに秋めく万歩計
こぼれ萩別れて
よりの情深し
秋風や人の噂が
歩き出す

船越 美喜

望月の車窓
離れず朱をぼかし
蛞蝓を踏みし
蹠の一と日憂し
揚羽の屍乾びて
稲の穂に絡み
田に水を二度は
入れしが主病むと
野良猫に与ふ糧
無し蜻蛉の贅

奥村 鷹尾

秋灯が朝迄消えず
進学生
蝸も静けさの内
吉田山
真つ直ぐに生きて
財無し敬老日
夏物を今だしまへず
秋暑し
アスベスト・アルカイダー等
夏寒し

岩崎 憲二

苔清水鳥の唄
ふ子守唄
森を出て杜へ入る
道白雨来
すだち来る頃
姉たちの世にあれば
新米やおごれる
口を拭ひえず
新米やよそへる
妻に湯気高く

高木 智

豊作の重さ
学校取り囲む
曼珠沙華風の
生まれる川映り
公孫樹散る
なんでも知つた
人がゐて
頂上の芒の
手話に開襟す
雲一つ愛宕に
置きて威し銃

松本 鷹根

嵯峨の奥
篋^{たかむち}を風琴として
尼寺の秋
露三碑涙もろげ
の名無草
奥嵯峨へ踏み
入れれば止む
昼ちちろ
金鳳花金の末路
の嵯峨の奥
りんだうの月
にあくがれ
夕野歩々

荻野 千枝

神麓集



木曾路の秋

柴田 朱美

山と山ぶつかり合つて稲架日和
木曾駒の風は芒を梳きあげる
コスモス群生木曾路のどまん中
ふりむけば着流しで来る木曾の秋
秋水のさざめいて湧く奈良井宿

虫の径

森津 三郎

本探す街角 図書館日傘さし
迎鐘撞く列路地を曲つても
とぶものの影あざやかに秋が立つ
下校児の列ばらばらに彼岸花
二度目から吠えぬ番犬虫の径

秋影

丸井 巴水

この山の木である柱月が出る
耳鳴りを誘つて低し秋の蝶
ずぶ濡れの曼珠沙華には叫びあり
天高し折り目のままの安全旗
気象図は秋鉛筆を洋へ置く

年のくれ

竹貫 示虹

年のくれ珈排館にワグナー鳴る
頂上は寒しまはりのよく見えて
ふくろふの首のくるりと派兵論
夜ふけの灯足袋つぐ妻の母に見ゆ
片足を上げて見送る除夜の鶏

初月夜

北川 孝子

重箱にとりどりの彩初月夜
茄子の馬作り上げたる左利き
夕焼川男も髪をかばふかに
夕菅やひとり暮しのそれなりに
秋あらた身ほとり出番ふえにけり

曲がり角

川崎 光一郎

今の世の勝ち組のやう天蓋花
火の山のマグマ噴くかに曼珠沙華
臆病なペットの犬や秋暑し
野分晴連れて竿竹売の声
うろこ雲混沌政治の曲がり角



京鹿子集

豊田都峰選

盆終る豊の上を水の音

夕立に濡れて行くなら蛙とび

猫じやらし風雲急の方程式

瑠璃いろの梨を太らせ樹下五尺

一服の味より器夜の秋

物忘れ外来と言ふ油照り

兵隊に行かず迎へる終戦忌

草魂の嘔び泣きゐる夏山河

落し文まこと略儀に候へど

炎天の羅漢みな泣き伏しにけり

夜の鯉のきらびやかなる光琳忌

京都 高木 晶子

千葉 河内 桜人

京都 小川 文子

大胆に切れよき点前光琳忌

金色の花さはに活く光琳忌

縋るよな眼差しに会ふ秋ともし

京町家葭戸を透きし白き蔵

流星の生涯の尾を確めよ

天道虫だまし弥陀の御掌を陣とせり

折れ易き鼻にきてゐる金木犀

おほよそは王子の狐この良夜

このまま秋森か頂上遠い遠い

今もまだきつと桔梗を探してる

炎天にはりつく告知モノクローム

千葉 伊藤 希眸

直江 裕子